

## 農 作 業, 季 節, 星

——西ジャワ・プリアガン高地における畑地耕作  
をめぐり季節性と農作業のタイミング\*——

五十嵐 忠 孝\*\*

### Agricultural Operations, Seasonality, and Stars:

### Annual Cycle of Upland Cultivation in a Sundanese Village, West Java\*

Tadataka IGARASHI\*\*

The annual cultivation cycle in rainfed upland fields in a Sundanese hamlet in Priangan, a hilly region in West Java, is described at some length. This report focuses on how Sundanese peasants reckon the timing of agricultural operations. In upland fields (or gardens), which are generally referred to as *kěbon* and are usually located on steep hillsides, tobacco, maize, hill-rice, *Phaseolus* beans, cassava, etc., are simultaneously or sequentially raised for cash income and home consumption. The agricultural operations for these garden crops are seasonal, in contrast to wet-rice cultivation, which is not seasonal because sufficient water is available throughout the year. The timing of upland agricultural operations is not calendrically fixed, but reckoned by continuous and careful observation of such indicators as seasonal fluctuations in rainfall frequency, moisture and wind direction, phenological changes in wild flora, the seasonal ap-

pearance or specific behavior of certain insects and birds, and, in particular, such marked stellar events as heliacal risings and culminations of the Pleiades (*béntang kěreti*), Orion's belt (*béntang wuluku*), and the Southern Cross (*béntang langlayangan*). These indicators allow the reckoning of time with varying accuracy throughout the year. Peasants believe that these allow them to identify the "best" timing for crucial agricultural operations such as sowing, planting, etc., and that delay in operations will result in reduction of yields. Interestingly, precipitation data suggest that some of these "best" times for crucial agricultural operations accord with the agroclimatologically determined times of onset and termination of the wet season. The peasants' reckoning of the timing of agricultural operations reflects the persistence of the *pranāramāngsā*, the traditional Javanese agricultural calendar.

### I は じ め に

\* この報告の基になった調査は、日産科学振興財団の研究補助金による「インドネシア人類生態学調査——特に村落住民の生計維持機構と人口現象——」(昭和54, 56年度), および文部省科学研究費補助金(海外学術調査)による「インドネシア保健生態学調査」(昭和58年度)(代表者はいずれも群馬大学医学部公衆衛生学教室鈴木庄亮教授)の一環として行われた。

\*\* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

季節の推移, とりわけ降雨の季節的変化は、天水田や畑地耕作を規制する重要な要素である。降雨の開始・終了時期は年による差が大きい。このため農耕民は「不定時法」的に季節の推移をはかり、降雨の開始・終了時期, あるいは降雨の多寡の季節的変化を予知して、播種・植付けをはじめとする農作業の

適期を決定する必要がある。自然、農耕民の季節への関心は非常に高く、さまざまな手掛かり——降雨のパターンそれ自身のほか、ある種の樹木の落葉・開花・結実、ある種の昆虫の出現などなど——から降雨の季節的变化を読み取り、農作業の適期を察知する。なかでもオリオン・ベルト、すばるなどの星、あるいは太陽がある特定の時刻に見える位置は、季節の到来を知るもっとも基本的な手掛かりとなる。インドネシア・西ジャワ州のプリアガン Priangan 地方では、オリオン・ベルトの見える位置と天水田における農作業との関係を次のようにいい慣らわす [Sutedjo 1959 : 9-10]。

Lamun béntang wuluku geus aya di kulon,  
Tah éta mangsana turun ngawalajar sawah.  
Lamun panonpoé ngamimitian ngésér-ngidul  
Sarta béntang langlayangan ayana lèmpéng  
di kidul,  
Éta téh cirina geus mimiti malawija.

オリオンが西に見えたら、  
荒起こしを始める季節。  
太陽が南に動き始め、  
そして南十字星が真南に見えたら、  
それはもう裏作を始めるしるし。

同種のいい慣らわしは、ジャワ島各地の降雨型の相違に応じてさまざまな変異を伴いながら、広く聞かれる。今日においても、なお焼畑耕作の盛んなバンテン、スカブミ地方にはオリオン座と焼畑耕作との関係を読み込んだ次のような俗言が知られる [Kools 1935 : 19 ; Meijer 1890 : 242 ; Wiryomijoyo 1982 : 215]。

Tanggal kidang, turun kujang  
Kidang ngaragsang, ngahuru  
Kidang manceuran, ngaseuk  
Surup kidang, turun kungkang

オリオン昇るころ、木を切り倒し、

オリオン高く見えたら、火を入れて、  
オリオン真上にきたら、種播きだ。  
オリオン沈むころには、カメムシが降る。

星をはじめとする季節の推移を示す自然の手掛かりと、しかるべき農作業との対応が、プラナタ・マンサ *pranátamangsá*<sup>1)</sup> という名でジャワ島に伝わる農作業暦である。今日のジャワ島農村においては、筆者の知る限り、プラナタ・マンサという言葉を知る者も少なく、また、個々の村人がその基礎となる暦法に通じているわけではない。しかし、村人の語るところに耳を傾ければ、季節の推移をはかり、農作業の適期を察知する彼らの知識の中に伝統暦の片鱗を容易に窺うことができる。

最近インドネシアでは、各地の気象条件に最も適した作付体系をみいだし、それを農業発展に結びつけていこうとする農学諸分野における研究活動に呼応するかのようになり、プラナタ・マンサをエコロジカルな観点から見直す研究、およびその基になる暦法の基礎的研究が、インドネシア人学者自身によって試みられるようになってきた。一般向けの雑誌などにも時折、プラナタ・マンサの紹介記事が載るのも、こうした動向とは無関係ではないだろう。しかし、現にジャワ島の一般の農民がどのように季節の推移をはかり、どのように農作業開始のタイミングを察知しているのかのモノグラフ的報告はたいへん少ない。このような資料的欠落を補う、ささやかな試みの一環として、以下、本稿において、西ジャ

1) 1855年 Pakubuwānā VII によって、伝統暦の“改暦”が行われたが [Oudemans 1881], “*pranátamangsá*”という言葉はこの改良暦に対して付された名称であって、それ以前には存在しなかったらしい。本稿では、在来の暦とこの“*pranátamangsá*”を含む総称として、「プラナタ・マンサ」という名称を用いることとする。

ワ州・プリアガン地方の1村落における季節の推移と農作業暦に関する事例的素描を行なってみたい。

## II 調査地

筆者の調査地は、その名をサラムンカル Salamungkal という山麓村で、西ジャワ州の州都、バンドン Bandung 市の東南東約 40 km に位置し、バンドン県パセー Paséh 郡に属する。サラムンカルは総世帯数約 300 のかなり大きな村落であるが、10~50 世帯の小集落に別れ、海拔約 800 m のゆるやかな尾根のあちらこちらに、手入れの行き届いた棚田に囲まれて所在する。この村落のすぐ南からガルート Garut 県レレス Lélés 地方へかけて広大な山塊が横たわり、海拔約 1,000 m 以上のマツ (*Pinus merkusii* Jungh. et De Vr.) の植林地帯(政府保護林)を除くと、いたるところの斜面に畑地・休耕地・二次林が広がる。サラムンカルの人々の生業活動は、この山塊斜面における畑地耕作、集落を取り囲む棚田における水稻耕作、および最寄りの町(主にバンドン市)への出稼ぎからなる。

調査地を含む地方の降水条件は、海拔高度により月別降水の絶対量にかなりの差がみられるが、年間にわたる月別雨量の推移は図1に示されるようなパターンをとる。Oldeman [1975] の見解に従い、月別降水量が 200 mm 以上の月を雨季月、100 mm 未満の月を乾季

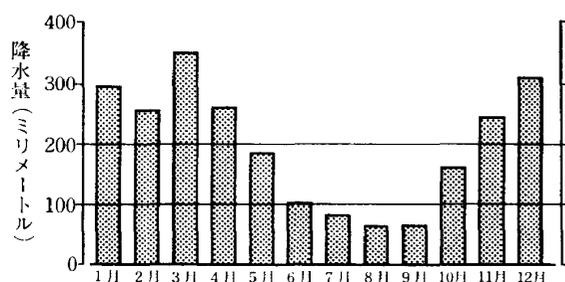


図1 月別平均降水量

月とすれば、乾季は6~9月、雨季は11~4月、そして、乾季から雨季への、雨季から乾季への移行期はそれぞれ10月、5月に相当するといえよう。この区分は、村人の述べる usum halodo (乾季), usum ngijih (雨季), および musim pancaroba (両季節の移行期) (musim mamaréng と musim dangdangrat に分かれる一後述) と、時期的にはほぼ一致するが、村人による季節、とりわけ雨季は、後章で報告するように主として雨の降り方に基づいて、さらに細かく区分される。

サラムンカルとその周辺の水田は、そのほとんどが棚田で、バンドン平地などに比べると、1筆の面積は非常に狭い。部分的には、雨季にのみ水稻耕作が可能となる水田 (sawah gělédug) もあるが、その多くは、乾季においても十分な湧水を利用できるため、年間にわたって水稻耕作の可能な水田 (sawah lédok) で、プリアガン高地の多くの地方でそうであるように、降雨の季節的多寡と関係なく水稻耕作周期が繰り返されている。<sup>2)</sup>

畑地は、水田と同じく、これを私有するのは一部の者のみであるが、水田の場合は小作人にさえなれないため、水田経営をしない者も少なくないのに対して、畑地経営をしない者はいない。これは、かつて植民地時代に茶のエステートであった広大な農地跡が、周辺住民に賃貸されており、サラムンカルの人々の大部分も、その小区画を賃借するからである。このエステート跡はサラムンカルの南、徒歩1時間ほどの所からガルート県レレス地方にかけて広がる山塊の大部分を占め、村人が賃借する畑地で、最も遠い所にあるものは

2) 水稻耕作周期が、降雨の季節的多寡と関係なく、収穫期がほぼ7カ月ごとに到来する独自のサイクルで繰り返されていることに関しては、別稿でやや詳しく報告したことがある [五十嵐 1984 a: 41-49]。本稿では、以下、降雨の季節的多寡に応じて農作業の行われる畑地耕作を念頭において、農作業暦の記述を進めて行きたい。

約2時間半の歩行時間(片道)を要する。この賃借畑を村人は *kēbon kontrak* (“契約畑”) と称する。“契約畑”のところどころには、サラムンカルの一部の村人が私有する畑地も少数所在するが、これらの私有畑と“契約畑”を、“集落から遠距離にある”との意で、村人は *kēbon misah* (“離れ畑”) と総称する。“離れ畑”には、谷筋に沿って、ところどころに井戸が採掘されており、かつては多数のクーリーが、乾季の最中この井戸水を汲み取り、勾配の急な傾斜地を長距離担ぎ上げる苛酷な労働に従事していたといわれるが、今日これを行う者はきわめて稀で、“離れ畑”の耕作は天水のみに依存して行われる。

これに対し、集落の南に広がる山塊のうち、集落に最も近い部分(片道の歩行時間約1時間以内)は、“契約畑”ではなく、サラムンカルの一部の村人が私有する林地ないしこれを開墾した畑地からなる。これら村人の私有地のあるところ一帯は、通称 *bēbēdahan* (“新田”) という名で呼ばれるように、かつて一時期、その一部が水田化されたこともあるほど、畑地としてはかなり水条件に恵まれており、必要な場合には、手間さえ厭わなければ、すぐ近くを流れる湧水を担ぎ上げ、水を掛ける (*nyébor*) ことも可能である。

### III 作付様式

畑地における作付品目のうち最も重要なものは、村人に現金収入をもたらすタバコ (*bako*) である。タバコに次ぐ重要な作付品目は、陸稲 (*paré huma*)、トウモロコシ (*ja-gong*)、インゲンマメ (*kacang beureum*)、キャッサバ (*sampeu*)、それに野菜類 (*lalabalaban*) で、このうちインゲンマメと野菜類は雨季と乾季の2度栽培される。陸稲は、かつては盛んに栽培されたというが、筆者が調

査を開始した1979年当時では、ほんの一部の者が栽培しているだけであった。当時村人の挙げた陸稲栽培が盛んでない理由は、収穫が不安定であること、とりわけ *kuuk* (根切り虫の類) による被害が甚だしいこと、陸稲の収穫期がタバコの植付けに忙しい時期に重なることの2点であった。ところが1983/84年の雨季、陸稲栽培をした者が好成績を挙げると、1984/85年の雨季より陸稲栽培をする者が急増し、1985/86年の雨季に至っては、陸稲栽培をしない者の方が珍しいほどにまでなっている。新しく陸稲栽培を始めた者の多くは、陸稲栽培の盛んなガルト県レレス地方に住む親類・縁者より種籾を入手したが、その品種の多くは、もともとサラムンカルにおいても栽培されていた在来種である。

天水のみに依存する“離れ畑” (*kēbon misah*) と、水条件に恵まれている集落近くの私有畑 (通称 *bēbēdahan*) では、休閑期間に差がみられる。すなわち、“離れ畑”は、1~3年ほど草地休閑されるのみで、地力収奪的な耕作が行われるのに対し、集落近くの私有畑は林地休閑されるのが普通で、竹林 (*kēbon awi*) とする場合は7~8年、*surian* (*Toona cinensis* M. Roem) を主要樹種とする林地 (*talunan*) とする場合は、10年あるいはそれ以上休ませ、完全に林地として回復するのを待って、再び開墾する。したがって、集落近くに私有畑を持つ者でも、これを休閑させている間、“離れ畑”を賃借して、畑地耕作を続ける。“離れ畑”は、集落近くの林地を開墾した畑地に比べ、肥沃度は低く、集落より遠距離にあるため、耕作条件において劣るが、サラムンカルを含む地方一帯の土地なし農民 (*jalma sangsara* “困窮する人”) にとっては、その小区画を賃借することにより、自らが経営耕作することのできる唯一の場所である。

作付様式にはさまざまな変異がみられる

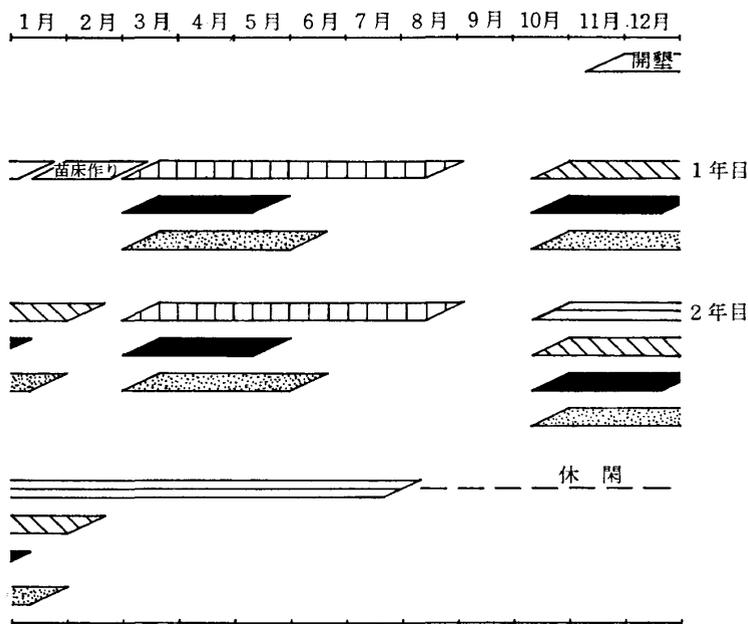


図 2-1

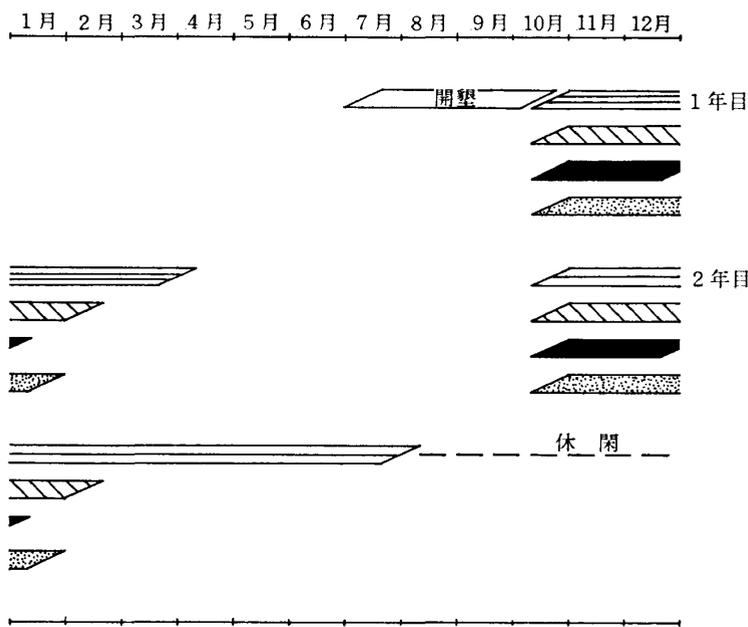


図 2-2



図 2 作 付 け 様 式

が、雨季作である陸稲を中心とする作付方式と、乾季作であるタバコを中心とする作付方式とに、分けることができる。後者の作付方式の場合（図2-1）、一定の休閑期間をおいたのちに耕起整地された畑地に、初回作物としてまず雨季末期（3～4月）にタバコが植え付けられ、タバコ収穫後の雨季初め（10～11月）にトウモロコシが作付けされる。2年目には、1年目と同様に、雨季末期に2回目のタバコが植え付けられ、その収穫後の雨季初めにキャッサバの単作（あるいはトウモロコシとの混作）を行なった後、休閑させる。このような作付方式は、肥沃度の高い畑地——集落近くに所在し林地を開墾した畑地——においてのみ行われる。肥沃度がなお十分高いと判断されれば、3年目にもタバコの植え付けが行われる。肥沃度の劣る“離れ畑”においては、タバコの連作は不可能で、タバコを1回植え付けた後は、キャッサバの単作、ないしトウモロコシとの混作を行なって後、耕作を放棄する。以上、いずれの場合も、タバコを植え付ける際、および、トウモロコシないしキャッサバを植え付ける際には、インゲンマメと野菜類が混作される。

陸稲を中心とする作付方式の場合（図2-2）、一定の休閑期間をおいた後に耕起整地された畑地に、初回作物としてまず雨季初め（10～11月）に陸稲が単作、ないし、トウモロコシ、インゲンマメ、野菜類との混栽が行われ、陸稲収穫

後から乾季の終わりまでの数カ月の間耕地を放っておき(ときとして、その間、再度トウモロコシを作付けしたのち)、雨季初めにキャッサバを植え付け(しばしば、トウモロコシ、インゲンマメ、野菜類との混栽)、その収穫後、休閑させる。あるいは、初回作物として、陸稲、トウモロコシ、キャッサバの3種混作が行われ、キャッサバの収穫後、休閑する場合もある。いずれの場合も肥沃度の劣る“離れ畑”で行われるのがふつうである。肥沃度の勝る集落近くの林地を開墾した畑地においては、より有利な現金収入源となる、タバコを中心として作付けする方がふつうであるが、栽培と収穫後処理にたいへん手間のかかるタバコ栽培を、高齢あるいは働き手不足などの理由で諦めた者だけが、陸稲を中心とする作付けを行うこともある。ただし、その場合、“離れ畑”におけるように陸稲栽培が1回のみで休閑されることはなく、雨季ごとに3年まで続けて行なったのち、休閑される。

なお、集落近くに所在し、林地を開墾した新畑においては、タバコを中心とする作付方式に陸稲栽培を混在させることもよく行われる。すなわち、第1回目のタバコの収穫後、陸稲栽培(通常、トウモロコシとの混作)を行うのであるが、このやり方にはやや無理がある。というのは、すでに触れたように、陸稲を“最も望ましい”時期に播種すると、その収穫時期が、タバコの植付けに“最も望ましい”時期とほとんど重なってしまうからである。したがって、それを避けるため、陸稲の播種を“最も望ましい”とされる時期より1カ月ほど早めに終えておかなければならない。このやり方は、乾季の最末期から雨季初めにかけての不安定な降雨に依存するため、雨量が不十分である時は、いつでも近くの湧水を担ぎ上げて水を掛けることのできる、集落近くの林地を開墾した畑地でのみ、行うことが可能であって、灌漑条件の劣悪な“離れ

畑”においては不可能である。

すでに述べたように、陸稲栽培が、ごく最近盛んになってきたため、今日においてこそ“離れ畑”の約半分が陸稲を中心に、あとの半分がタバコを中心に作付けされているが、つい数年前までは、陸稲を中心に作付けされていた畑地は1割にも満たなかった。にもかかわらず、村人に畑地の一般的な利用方式を尋ねると、きまって、“乾季の盛りに開墾して、雨季の始まりとともに陸稲を播種して……”というように、陸稲を中心とする作付様式が、まず答えとして戻ってくるのは興味深い。このような、季節の推移と農作業との関係については、次章でやや詳しく報告したい。

#### IV 季節の推移と畑地耕作過程

畑地や水田における播種、移植、除草、刈取りなどの農作業は、何月ごろに行われるのか、という質問を村人にぶつけてみると、多くの村人は、答えられないか、全く見当違いな応答をする。彼らには農作業を暦月に対応させて語る習慣がないからである。村人が、日常生活において用いる暦が自然環境の季節変化と対応しないイスラム暦であることも、あるいは関係があるかも知れないが、それはともかく、やはり、我々のような他者にとってはたいへん不都合な習慣である。実際、水田や畑地での播種、移植、除草、刈取りなどの農作業は何月ごろ行われるのか、という質問を試みる以外に、調査地における農作業カレンダーを作成する方法を思い付かなかった筆者にとって、“何々月には何々の農作業をする”式に回答してくれない村人には、すっかり困惑したものである。

これを解決できるきっかけになったのは、村人どうしの会話の中に、星の名前と覚しき単語が聞き取れたことによる。実際、雨続き

で、もう幾日も太陽や星空が見られない時期においても、彼らが年間にわたって注目している星の位置を尋ねてみると、村人は迷わず応答することができるほどに、彼らのカレンダー的感覚——必ずしもシステムチックとはいえない天体の位置と季節の推移に関する彼らの知識を“sidereal calendar”とでも呼ぶことが可能ならば——は、鍛えられていると筆者は感じる。星と季節、および農作業との関係に関する村人の“常識”がいったんわかってしまうと、農作業暦をグレゴリー暦に対応させるのは比較的簡単な作業となるはずである。

しかし、播種時をはじめ、村人にとって重要な時期の到来を知らせるといわれる、ある星の特定の位置関係についても、その星がその位置に見える特定の時刻についても（“就寝前の祈りをするころ”とか、“夜半過ぎ”とかいうように）、正確な日時を特定できないほどの幅があり、その時期が到来したとする実際の判断は、人によりかなり異なる。また、ある星が水平線から昇る、あるいは沈むのが重要な手掛かりとなる場合、そのような現象を観察できる日に、観察者が見通しの良い平地にいるか、水平線を見通すことの困難な山間部にいるかによって、かなり異なると思われる。が、この程度の狂いはあっても、かなり広い地域一帯の人々に季節の到来を知らしめるうえで、星と季節、および農作業との対応は、今なお重要な役割を果たしている。もちろん、季節の到来を知るのは星によるだけではない。以下に、村人が実際にどのように季節の推移をはかり、農作業のタイミングを察知するのかの事例を報告してみたい。

#### IV-1 乾季の最盛期から雨季入り前後にかけて

村人によれば畑地の開墾 (muka kēbon) は、今も昔も、乾季の盛りにするもの、という。ところが、実際には乾季の最盛期から雨

季初めにかけてのかなり長い期間にわたって、調査地を含む山岳地方一帯の山々から、畑地の開墾を示す煙がたなびくのを見ることができし、後にも述べるように、林地 (talunan) の開墾は雨季初めに行われるのであるが、しかし、ここではしばらく、村人の言に従い、乾季の盛りから記述を始めたい。

“夜明け前、すばる (béntang kērēti<sup>3)</sup> がほぼ真上に見えているころ” サラムンカルの村人はきたるべき雨季作の心配を始める。“夜明け前、オリオン・ベルト (béntang wuluku) が pēcat sawēd の位置 (10時ごろの太陽の位置) にあるころ”，あるいは“夜半 (午前0時前後) にすばるが昇るころ” というのも時期的には同じで、グレゴリー暦の8月ごろに相当する。<sup>4)</sup> 乾季の最中であるこの

3) サラムンカルの村人が、季節の推移、あるいは農作業の開始時を知る手掛かりとして注目する星は、béntang kērēti (すばる)、béntang wuluku (オリオン・ベルト)、それに béntang langlayan (南十字星) の3つである。7つの星からなると言われるすばるは、béntang ranggeuyan とも言われるように、その形状が“穂” (ranggeuy) に譬えられることもあるし、あるいは“米の蒸し籠” (aseupan)、または時計の短針のようだと説明される。オリオン・ベルトと南十字星は、文字通りそれぞれ、鋤 (wuluku)、扇 (langlayan) に譬えられる。プリアガン高地の西部では、すばるは guru désa (“村の先生”)、オリオン・ベルトは kidang (鹿の1種 *Muntiacus muntjak* Zimmerman) の名で呼ばれる。筆者の知る限り、プリアガン地方では、すばるとオリオン・ベルトは1年を通して注目されるが、南十字星は乾季の到来を知るだけの手掛かりとして用いられるらしい。なお、村人の述べる星の同定、およびその星が見える位置とそのときの時刻からその時期がグレゴリー暦の何月に相当するかのおよその判断は、ジャワ島用に作られた回転式星座早見盤 [Visser n.d.] を用いて行なった。

4) 冒頭に掲げた俗言 (その2) の Kidang ngarangsang, ngahuru (“オリオン [夜明け前に] 高く見えたら、火を入れて”) というのは、このころを意味すると思われる。なお、Kools [1935: 19] は ngarangsang (“高くなる”) を“9時ごろの太陽の位置”と解釈し、その時点がグレゴリー暦の8月1日ごろと推定している。

時期は、のちにも述べるように、タバコの収穫が終わりに近づいているところか、あるいはほとんど終わっているところである。タバコの収穫期を通して、タバコの葉を半製品化するプロセスの一環として夜露に当てる作業 (ngibun bako) を行うため、村人は普段よりもさらに早く起きだして、暗い冷気のなかで屋外活動を始める。このため自然、乾季特有の澄み切った夜明け前の星空を、見上げることも多くなると思われる。この時期は usum katiga,<sup>5)</sup> すなわち usum halodo (“乾季”) のうちでも最も乾燥度のきつい季節である。収穫の終わったタバコ畑は、そのまましばらく放置され、乾ききった土壌に、枯れたタバコの立茎が残されているのみである。遠目には、マツの植林地帯を除くと、山膚が“赤々”と見える季節である。

この時期に開墾の準備が始まる土地は、数年前まで畑地として耕作され、チガヤ *eurih* (*Imperata cylindrica* Beauv.) などの禾本科の雑草に覆われ、ところどころに低木が自生しているような草地 (jami) である。このような草地が畑地として開墾されると、*kēbon jamian* あるいは単に *jamian* と呼ばれる。竹林 (*kēbon awi*), あるいは *surian* (*Toona sinensis* M. Roem) を主要樹種とする林地 (*talunan*) は、初回作物としてタバコが植え付けられるのがふつうであるため、この時期に開墾されることはない。

開墾の準備が始まる *jami* (草地) は、一部の村人が *kēbon misah* (“離れ畑”) に私有するものを別にすると、すべて賃借した畑地 (*kēbon kontrak*) である。雨季作物を植え付けるため新たに畑地を賃借するのは、毎年

5) Katigaという言葉は、プラナタ・マンサの Katiga (第3月) に由来する。プラナタ・マンサの第3月は乾季の最中であるためであろうか、村人はもっぱら“乾季の最盛期”という意味でこの言葉を用いる。

Agustusan (8月17日の独立記念日)<sup>6)</sup> のころである、と村人は言う。年間の賃借料は、土地の条件にもよるが、100 tumbak (約 1,600 m<sup>2</sup>) 当たり、1979年当時は4,500~5,000ルピア、1985年の時点においては7,500~8,000ルピアであった。賃借料の支払いにはタバコの販売による収入を充てる。新たに賃借した草地でこの時期に行う作業は、まず *nyasap* (雑草刈り)、次いで雑草が乾燥してからの *ngaduruk* (火入れ)、さらに *ngarawuan runtah* (ゴミ整理) などである。雑草の状態によっては *nyasap* を省略して直接火入れを行うこともある。乾燥し切ったこの時期は強風に煽られて、しばしば火入れ作業の火が飛び、山火事の発生する時期でもある。これらの作業が終われば、雨季の到来を予告する“一番雨” (*hujan mimiti*) を待って、荒起こしに取り掛かる。なお、*jami* (草地) とは区別される *reuma*, すなわち、ついこの前の乾季作あるいは雨季作の収穫後、そのままほんの数カ月間放置され、その間に生い茂った *alimusa* (*Mimosa invisa* Mart.) などの雑草の中に収穫しそとなったキャッサバが数本立っているような畑地跡は、雑草の繁茂状態によっては火入れ作業の必要がなく、その場合は、“一番雨” がきてから、急ぎ *ngarawuan runtah* (ゴミ整理) に取り掛かっても遅くはない。

乾季の末期、強い東風が土埃を舞い上げ、遠くの間々が霞んでみえるような日が続く。渡りをするツバメ *walét* の一群が北からやってきて、高く旋回しているのが見られるのも

6) Agustusan という言葉は、Agustus (グレゴリー暦の“8月”) を意味するオランダ語由来の借用語) に由来し、8月17日の独立記念日、転じて村ごとに当日行われる *upacara* (記念式典) を意味する言葉として用いられる。村人の日常生活とグレゴリー暦とは縁がないにもかかわらず、この Agustusan だけは、“村長からのお達し”によりすべての村人に式典参加の義務があり、参加した者には“参加費”が与えられるためであろうか、1年のうちの照準点として、よく用いられる。

このころである。<sup>7)</sup>そして、幹の太い竹 *awi gĕdé* (*Gigantochloa apus* Schult.) の葉が茶褐色に変色するころ、あるいは落葉 (*ngarang-rangan*) を始めるころ、“一番雨”がやってくる。集落のあちこちで一斉に赤茶け、続いて落葉を始める *awi gĕdé* の竹林は、乾季から雨季への変わり目を教えてくれる、最も重要な手掛かりである。この *awi gĕdé* の葉の変色とそれに続く落葉によって、村人は、このころに降る雨が“一番雨”であることを確認し、いよいよ雨季が間近いことを知る。このころ、*limus* (*Mangifera foetida* Lour.)、*jambu aér* (*Eugenia aquea* Burm. f.) などの果実が熟して食べられる。平地部ではすでに出回っているマンゴーが、山岳地帯ではやっと花を咲かせる。

“一番雨”は、また *hujan kapat* と呼ばれるように、プラナタ・マンサの *kapat* 月(第4月)(グレゴリー暦の9~10月ごろ)に降る雨である。<sup>8)</sup>この雨の特徴は強い風と雷を伴うが、降っている時間は長くはない強雨であることで、乾季の間にも時々降る雨とは降り方があきらかに異なる。乾季が長く、激しければ、“一番雨”に伴う風も激しいとい

7) Hoogerwerf [1949:172] はスダ語の *walét* として6種のツバメ類を掲げているが、このうち村人が季節の到来を知る手掛かりとするのは、渡りをする *Hirundo rustica gutturalis* Scop. などであろうと思われる。このころ、すなわちプラナタ・マンサ暦の *kapat* 月(第4月)の到来を知る手掛かりとして、*manyar* (*Ploceus manyar*, 英名 weaverbird) が特徴的な巣作りをすること、および、野性のブンチョウ *galatik* (*Padda oryzivora*) が群れをなしてやってくることを多くの文献が挙げているが(例えば Anonymous [1970], van den Bosch [1980], Tjondro Negoro [1880], Tohir [1948:15]), 筆者自身はいずれも確認していない。

8) *Hujan kapat* の *kapat* という言葉もまた、*ka-tiga* (注5参照)と同様に、プラナタ・マンサにおける暦月の名称が今日のジャワ島農村において、なお生きている例である。しかし、いずれの言葉も、本来の意味を知る村人はほとんどいない。

う。このころ、近隣の村々からはもちろん、ガルト県などの村々からの来訪者、バンドン市などへ出稼ぎに行ってきた者たちから、いついつどこどこで“一番雨”が降ったという情報が寄せられるようになると、荒起こしの準備を始める。

乾燥しきった土壌は固く (*teuas*)、鍬がたたない。畑の荒起こし (*mĕncug*) は、“一番雨”が降り、土壌がほどよく湿って、柔らかい (*hipu*) うちに行うのが最も効果的である。“一番雨”は1日しか降らないこともあれば、数日間続くこともあるが、“一番雨”の降り終わったあとは、しばらくの間再び暑い晴天続きとなるので、荒起こしのタイミングを逃した者は“二番雨”を待たなければならぬ。<sup>9)</sup>乾季の盛りに火入れをしておかなかった者は、まず火入れをしてから同日か翌日に荒起こしを行う。*Sawah gĕlēdug* (雨季作田)の荒起こし (*ngawalajar*) が行われるのもこのころである。

荒起こしを終えたあとの畑は、そのまましばらく放置する。これを *ngéré tanah* (“土地を日干しする”) という。この期間を十分にとることで、土壌中に住む最もやっかいな害虫である *kuuk* (根切り虫、甲虫の幼虫)などを殺す効果があるとされる。陸稲を作付けする場合は、この *ngéré tanah* の期間を十分にとるかどうかが、収量の多寡と安定性を決めるひとつのポイントになる。ただし、雨季作物としてトウモロコシとインゲンマメのみを作付けする場合は、*ngéré tanah* が行われることはあまりなく、したがってこの場合の荒起こしは、いよいよ播種時が迫ってから急ぎ行っても遅くはない。

約1カ月、あるいはそれ以上続く“畑地の日干し” (*ngéré tanah*) の間、“一番雨”と同

9) このようにある農作業を“最も望ましい”とされる時期に行うことのできない者は少なくない。この点については、最終章でまとめて触れたい。

様な降り方で、村人が *hujan dua kali* (“二番雨”), *hujan tilu kali* (“三番雨”)……と名付ける降雨が何回か不定期に繰り返される。このようなきまぐれな降雨を *hujan kadongdora*, または *hujan panyélang* と呼ぶ。また、上空の雨水が強い風に吹き飛ばされて地上にまで落ちてこないため、集落の上半分は雨が降っているのに、下半分では降らないような雨 (*hujan silantung*) なども、このころに特有な雨である。これら乾季から雨季への季節の変わり目に降る雨について、村人は *hujan maéhan kongkoak* (“雨が若芽を殺す”), あるいは *hujan maéhan jukut* (“雨が草を殺す”) といい慣らわす。これらの意味するところは、雨が降っていったん発芽した雑草が、引き続き降雨がないために枯死してしまうことで、“湿”と“乾”がきまぐれに繰り返すこの時期の端的な表現といえよう。村人によれば、この時期は *téréh ngijih* (“まもなく雨季になる”) であって、まだ *usum ngijih* (“雨季”) とはみなされない、すなわち播種を行うにはまだ早すぎる段階である。このような乾季から雨季への移行期は *musim mamaréng* と呼ばれ、<sup>10)</sup> “風邪” (*sakit panas*) がはやる時期とされる。夜明け前の西の空に低くすばるが、その上にはオリオン・ベルトが見えるところである。<sup>11)</sup> このころ、*wanci*

*bédug* (正午) に人や日時計の影がなくなる日がある。<sup>12)</sup> 次いで、日ごとに太陽の昇る位置が、真東より“南へずれて行く” (*panonpoé ngagilir ka kidul*) ので、洗濯物の干し場を家の北側から南側に移さなければならない。このような太陽の動きは目前に雨季の迫っているしるしである。村人は播種のタイミングを待ち構える。

#### IV-2 雨季の開始期から末期にかけて

陸稻、トウモロコシなどの雨季作物をいつ播種するかは、村人の重大関心事である。サラムンカルを含む山岳地方では、すばるが、*isa* (“就寝前の祈り”) をするころ (夜7~8時ごろ)、東の稜線から昇ってくる時期が、陸稻を始めとする雨季作物の“最も望ましい”播種時である、といわれる。

ジャワ島民の伝統的な *sidereal calendar* において暦法の基礎となる、いくつかの重要な *apparition* (特定の星の特定の見え方) が生ずる日付を、プラネタリウムを用いて推定している Ammarell [1983] の実験によれば、日没直後の東の水平線から昇ってくるすばるが、視認できる最初の日は11月8日 (1850年当時) である [*ibid.*: 12]。Ammarell が実験の基準とした時刻が「日没直後」であるのに対して、村人が照準とする時刻は、これより1~2時間後の“就寝前の祈り”をするころで、したがって、昇ってくるすばるを認めることのできる時点は、Ammarell の推定日 (11月8日) より少し早い時点であると思われる。すなわち、村人の述べるすばるの位

- 10) *Mamaréng* は、プラナタ・マンサで雨季・乾季の移行期を意味する *maréng* に由来すると思われる。村人は *musim mamaréng* を乾季から雨季への変わり目(グレゴリー暦10月ごろ)と説明するが、プラナタ・マンサ暦でいう *maréng* は、これとは逆に、雨季から乾季への変わり目(グレゴリー暦5月ごろ)を意味する [Daldjoeni 1979: 70; 1983: 2; Horne 1974: 366]。なお、スダ語の標準的な辞書 [PKLBSS 1976: 300] では *mamaréng* の意味を「*kapat* 月の終わるころ、まもなく雨季になるころ (*dangdangrat* の反対語)」としており、村人の説明と一致する。
- 11) 冒頭に掲げた俗言(その1)の *Lamun béntang wuluku geus aya di kulon, tah éta mangsana turun ngawalajar sawah* (“オリオン座が[夜明け前に] 西に見えたら、荒起こしを始め季節”) というのは、このころを意味する。

- 12) この日は、南緯約7度のジャワ島では、10月12日ないし13日に相当する [Ammarell 1983: 12, 22]。なお、カリマンタンには正午の影が無くなることをもって雨季作開始の手掛かりとする習慣がみられる [Idak 1982: 17-18; Schophuys 1936: 112]。また、ケンヤーとカヤンは巧妙な方法で正中時の太陽による影の長さを測り、農作業開始の適期を知るという [Hose 1905]。

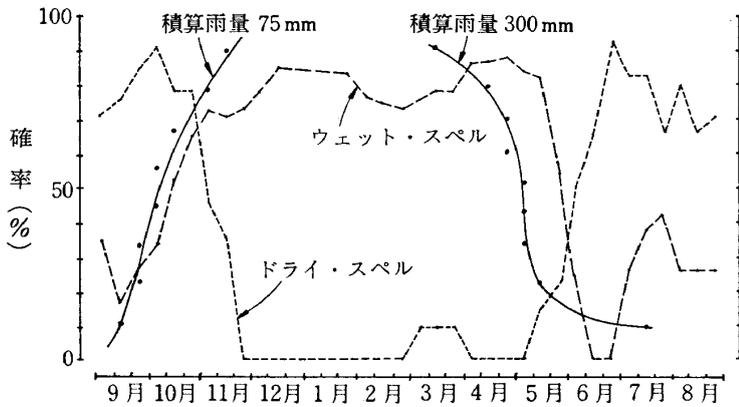


図3 乾季から雨季へかけて積算雨量が75mmとなる確率，雨季から乾季へかけて300mmの積算雨量がなお期待できる確率，など

置と，それが見える時刻から推定できる“播種時”は，グレゴリー暦の10月終わりごろと考えることができる。<sup>13)</sup>

今，日雨量データを用いて，乾季のピーク時からの積算雨量が，畑地耕作の開始に必要なといわれる75mmに達する確率を，各月の三半期(10日間)ごとに試算してみると，積算雨量が75mmとなる確率は，10月の第1三半期(10月1～10日)ごろで約50%，10月の第3三半期(10月21～末日)ごろには約75

13) 陸稲の播種，あるいは水稻の移植のタイミングをすばる，あるいはオリオン・ベルトの位置から判断する技術は東南アジアの島嶼部に広く知られる。ジャワ島については，de Bie [1901: 26-27; 1911: 11]，Sollewijn Gelpke [1874: 135-136]，玉井 [1944: 6] などによる報告のほか，Koens [1926: 23] は，ヨクヤカルタで行われている習慣として，毎日没直後，粃米を手平にのせ，その手をオリオン・ベルトの見える方向にかざして，粃米がずり落ちるほどの高さまでオリオン・ベルトが昇ってきたとき(Ammarell [1983: 13-14]の推定では1月4日ごろ)を稲の播種時と判断する，という習慣を報告している。日没直後あるいは夜明け直前に特定の星へ向けて手をかざし，粃米や腕輪がずり落ちることをもって農作業開始の適期と判断する似たような習慣は，カリマンタン(ランダック・ダヤック)[Schadee 1914: 134]，スマトラ(アチュー)[Snouck Hurgronje 1906: 257]，あるいはマレー半島(ペラック，ケダー)[Winstedt 1951: 44] などでも知られる。

%となる(図3)。<sup>14)</sup> 畑地耕作の開始可能時期を，75mmの積算雨量が75%の確率で実現する時期とすれば，雨量データから判断される耕作開始可能時期と，村人の述べるすばるの位置・時刻から推定できる播種開始の時期は，奇しくも一致することになる。<sup>15)</sup>

土壌が播種に好ましい水分を含むようになる時期を，長年の経験からすばるの位置によって判断する技術は，しかし個々の年については当てはまらないこともあるはずである。

実際，播種の開始時期を，すばるやオリオンの位置だけを頼りに決めることは，早すぎてしまうことも遅すぎてしまうこともあって危険である，と述べた村人もいる。“早すぎる危険”とは，いうまでもなく，きまぐれな降雨が規則的な降雨に変化するタイミングを早まって判断して播種したため

14) ここで計算に用いたのは，バンドン測候所の公表されている1957～1964年 [Republik Indonesia 1980: 136-181] および1971年 [Republik Indonesia 1976: 79-85] の9カ年の日雨量時系列データである。計算方法，および，畑地耕作開始に必要な最小積算雨量を75mmとするなどの見解は Oldeman *et al.* [1982: 149-158] および Morris *et al.* [1979] に従った。

15) 以上は天水のみに依存する *kébon misah* (“離れ畑”) についてである。村落近くに所在し，必要な場合は湧水による灌漑の可能な私有畑については，すばるが *isa* (“就寝前の祈り”) のころ東の空に見えるようになってから播種するのでは遅すぎる，夜明け前にすばるが西の空に傾き，オリオン・ベルトはまだ天頂近くに見えるころ(10月中旬)が，播種にちょうどよいころであるという。夜半前(夜10時ごろ)すばるが“8時の太陽の位置”にいるところが播種の適期であるとするのも，内容的には同じで，やはり10月中旬ころをさしている。なお，冒頭に掲げた俗言(その2)の *Kidang manceuran, nga-seuk* (“オリオン [夜明け前に] 真上に来たら，種まきだ”) は，このころより少し早い時点の意味すると思われる。(Kools [1935: 19] はグレゴリー暦9月15日ごろと推定している。)

に、発芽したばかりの作物がわずかな期間の乾燥にも耐えられず枯死してしまう危険である。“遅すぎる危険”とは、のちにも述べるように、規則的な降雨パターンに変わってしばらくののちに必ず訪れるといわれる“雨季の小休止期”に、発芽後の幼植物が遭遇して枯死してしまう危険である。“早過ぎる危険”を避けるため、サラムンカルの村人が注目する自然現象は、羽蟻 *siraru* の分封と数種のコオロギ *jangkrik* の出現である。

“一番雨”から数えて数回目の雨がひとしきり激しく降ったあと、雨足が弱まり、日が暮れてからもなお“シトシト雨”が降り続けているような宵、突然、羽蟻 *siraru* の大群が、明かりを求めて飛来する。この羽蟻はたいへん美味で食用として好まれるため、大人も子供も総出で争って捕まえる。ケロシン・ランプや懐中電灯の明かりの中に飛び込んでくる羽蟻は、再び飛ぶ力を失い、容易に捕まえることができる。この羽蟻の飛来が、ジャワ島で広く聞かれるように [de Bie 1911: 11; van Lookeren Campagne 1899-1905: 484; Veth 1907: 496; Zoetmulder 1974: 195, 201], 雨季作開始のタイミングを知るための直接の手掛かりとなるものである。<sup>16)</sup> 羽蟻の飛来もまた、そのところが迫ると、“一番雨”のときと同じように、いついっどこで羽蟻が出たという情報が盛んに寄せられるようになる。

サラムンカルの村人のなかにはシロアリの飛来より、コオロギ *jangkrik* (*Gryllidae*)

の出現により一層の信をおくとする者もある。<sup>17)</sup> *Ngéré tanah* (畑地の日干し) 中、雨が降っては発芽・生長し、引き続く乾燥で枯死した雑草の間に、飛びはねるコオロギが見られるようになる 때가、砕土、畝作り、そして播種と続く一連の農作業を開始すべき適期であるという。子供たちがコオロギを捕まえて遊ぶのに夢中になっているころ、大人たちは雨季作物の播種作業に忙殺される季節である。このころに降る雨は *hujan pangaseukan* (播種雨)、あるいは *hujan pamelakan* (植付け雨) と呼ばれる。<sup>18)</sup>

播種作業はまず、男たちが鍬 (*pacul*) で土塊を砕き (*ngěprék*)、表面を平らにする (*ngipur*)。続いて、3人の女が一組になり、先頭の女が播種棒 (*luju*) で穴を穿ち (*ngaseuk*)、2番目の女が数粒の種子を入れ、3番目の女が一つまみの肥料を入れ、足で穴を塞ぐ (*muuhan*)、という動作を繰り返しながら行われる。陸稲、トウモロコシ、インゲンマメを混栽するときは、通常、播種日を1~2日ずらして行う。同一の畑地に、スンダ人が生食することを好むイヌホオズキ *leunca* (*Solanum nigrum* L.), ナス *térong* (*Solanum melongena* L.), 小型のトウガラシ *céngék* (*Cap-sicum frutescens* L.), シカクマメ *jaat* (*Psophocarpus tetragonolobus* D.C.), ダイコンの一種 *lobak* (*Raphanus sativus* L.), トマトの一種 *kěmir* (*Solanum cerasiforme* Dun.), ハク

16) *Siraru* は、有翅の *rinyuh* (シロアリ) に対する名称であるが、ここでは“羽蟻”としておく。雨季初めに飛来するのは *siraru lutung* と呼ばれる種類で、これより一層美味とされる *siraru minyak* は雨季半ばに出現する。van der Burg [1904: 90] はジャワ島の可食性シロアリとして *Termes sumatranum*, *T. fatale*, *T. mordax*, *T. stox*, *T. destructor* などを挙げている。なお、中央スラウェシのト・バダ [Woensdregt 1928: 148], 南スラウェシのトラジャ [山下 1982: 378] などでも羽蟻の出現を雨季作開始のタイミングを知る手掛かりとする。

17) 雨季初めに出現するのは *jangkrik* と総称されるコオロギであって、*kasir* と呼ばれる大型・可食性のコオロギは雨季半ば~後半に現われる。

18) 以上は天水のみに依存する“離れ畑” (*kěbon misah*) についてである。「“離れ畑”では羽蟻、ないしコオロギの出現を見てからでないと、播種してはいけないが、*běbédahan* (集落近くの畑地) ではその前にしてもよい」と村人がいうように、集落近くの灌漑条件のよい畑地においては、たとえ *kalémpohan* (“降雨がないため水不足となる”) となった場合でも、近くの湧水をかけて灌漑することができるため、しばしば播種が早めに行われる。

サイ pétsai, andéwi (*Cichnrium endivia* L.), mangsoy などなどの野菜類 (lalab-lalaban) も植え付けられる。野菜類は、陸稲、トウモロコシなどに平行して植える場合も、畑地の一区画あるいは周囲に植える場合もある。

陸稲の播種が行われるころ、3つのマイナーな穀類の播種も行われる。アワ kunyit (*Setaria viridis* Beauv. var. *italica* Asch. et Gr.) は、通常、あらかじめ陸稲の種籾と混ぜておく。ジュズダマ hanjĕli (*Coix lacryma Jobi* Linn.) は、畑地の周辺部に単独に穴播するのがふつうであるが、陸稲の種籾と混ぜることもある。ソルガム gandrung (*Sorghum vulgare* Pers.) は陸稲と混ぜることはなく、畑地の周囲か、水田の畦に穴播される。陸稲は播種後1週間ほどで jumarum (“針の様な”) 2週間ほどで ngabulu tikukur (“キジバトの雛の羽毛の様な”) と呼ばれる生育段階になる。<sup>19)</sup>

播種のピークは約1カ月続く。幹の太い竹 (awi gĕdé) が再び葉を付け (awi gĕdé mangkat deui), タケノコ (iwung), キノコ (sung) の副食が出回るようになると、村人はしだいに播種の“遅すぎる危険”を気にしなければならない。というのは、播種に好都合な“播種雨”がしばらく続いたあと、雨足がパツパツ止まってしまう halodo panyĕlang (雨季の小休止期) が訪れるからである。久しく見ることのできなかつた夕焼け (layung) が“雨季の小休止期”に入ったことを告げる。この“雨季の小休止期”は毎年必ずやってくる、しかし、どれくらいの期間続くかは毎年一定していないという。

“雨季の小休止期”に入ると、土壌は再びカラカラに乾き、あたたかも乾季に逆戻りしたかのような様相を示す。“適期”に播種され

た雨季作物は、このころまでには根を張っているのに、十分乾燥に耐えることができるが、播種の遅すぎた場合は、この乾燥に耐えることができず、枯死してしまう危険性がある。“雨季の小休止期”に入ったら、陸稲、トウモロコシなどの播種は不可能である。しかし、もし、“雨季の小休止期”が訪れず、降雨が続くと、陸稲、トウモロコシなどの雨季作物は腐ってしまうという。

陸稲はこの“雨季の小休止期”の間に bubuni tikukur (“キジバトが見え隠れする”) から lumeunca (“イヌホオズキ leunca の背丈ぐらい”) と呼ばれる生育段階まで生長する。この段階で、1回目の除草 (ngoyos) と施肥 (ngagĕmuk) が行われる。この他、二つの農作業がこの“雨季の小休止期”に行われる。

その一つは、乾季作物であるタバコ栽培の準備である。雨は、“雨季の小休止期”の間、全く降らないわけではなく、不定期に何回かの降雨が見られる。ちょうど“一番雨”からしばらくのあいだ続く降雨パターンと似て、“乾”と“湿”が不定期に繰り返されるこの季節は、初回作物としてタバコを栽培するための畑地を開くのに最も適している。この時期の“乾”を利用して火入れを、“湿”を利用して荒起こしを、再び“乾”を利用して ngéré tanah (畑地の日干し) を行うことができるからである。竹林または surian (*Toona cinensis* M. Roem) などを主要樹種とする林地 (talunan) が開墾されるのはこの時期に限られる。また、初回作物としてタバコを植え付けるために kĕbon misah (“離れ畑”) の小区画を賃借するのもこの時期で、火入れの煙が山々から立ち昇る光景を再び目にするこの多いシーズンである。

林地 (talunan) (これらはすべて村人の私有地である) を開墾する者は、まず有用樹を残して伐採 (nuar), つづいて下草刈り (nya-

19) 陸稲の生育段階の名称は、別稿で報告した水稻のそれ [五十嵐 1984 a : 31] と基本的に同一である。なお、jumarum は、陸稲については、ngabulu irung (“鼻毛の様な”) とも呼ばれる。

car) を行う。伐採された竹ないし樹木はそのまましばらく放置・乾燥させる (ngagaring-an)。その間、商品として売る主幹、薪として自家消費する枝など利用できる部分の仕分け、村までの運搬、利用価値のない小枝、葉、根などを1個所に集めて火をつける作業 (ngadurukan) が連日行われる。竹の柵で畑地を囲む作業 (magër) もこの間に行われる。林地を開いて造成した畑地は kěbon bukaan あるいは単に bukaan と呼ばれる。

この期間に行われるもう一つの農作業はキャッサバの植付けである。キャッサバをこの時期に植え付ける理由は、雨が多すぎるとキャッサバの苗が腐ってしまうからだとする者もいるし、そうではなく、陸稲、トウモロコシ、インゲンマメなどの播種を優先させるため、キャッサバの植付けが遅れて、たまたま“雨季の小休止期”に一致するだけであると説明する者もいる。実際、キャッサバは、集落内の敷地の片隅や、畑地の周辺部に年間にわたって随時植え付けられるが、最終作物としてのキャッサバが、1～3年使用した畑地全面に単植されるのは、“雨季の小休止期”に行われることが多い。ただし、陸稲とキャッサバを混作する場合は、陸稲が ngabulu tikukur (“キジバトの雛の羽毛の様な”) から bubuni tikukur (“キジバトが見え隠れする”) と呼ばれる生育段階になったとき、キャッサバを植え付けるのがよいという。<sup>20)</sup>

平年ならば、“雨季の小休止期”が終わるころ、日没後の東の空に見えるすばるの位置

20) 陸稲と混栽する場合、キャッサバの植付けを数週間遅らせる理由を村人は、もし陸稲、トウモロコシの播種と同時に植え付けると蔭 (hieum-hieum) を作って、陸稲、トウモロコシの生育を害するから、と説明する。同様な理由で、ジャワ島の各地 [Falcon *et al.* 1984: 29-32], 南スマトラのランボン [広瀬 1979: 62] などにおいても、キャッサバの植付けが行われるのは、陸稲、トウモロコシの播種後3～4週間後、ないし1カ月後であるという。

はかなり高くなっており、その下に低くオリオン・ベルトが見える。また、夜明け前の西の空なら、すでにすばるは水平線下に没し、これを追うようにオリオン・ベルトが沈もうとしているのが見える。<sup>21)</sup> 太陽が昇る位置は最も南にずれ、wanci bėdug (正午) における人や日時計の影が最も北へ伸び (すなわち冬至、グレゴリー暦12月21ないし22日)、続いて太陽の昇る位置は日ごとに北へずれてゆく。これらの手掛かりはいずれも“雨季の小休止期”の終わり、すなわち雨季の最盛期の到来をしめす。

“雨季の小休止期”が終わると、pabaru と呼ばれる再び雨続きの季節が訪れる。この pabaru と呼ばれる季節は、さらに pabaru Walanda と pabaru Cina の二つに区分されるが、その名称からも知られるように、平年なら、前者はグレゴリー暦の12月～1月ごろ、後者は1月～2月ごろに相当する時期である。<sup>22)</sup> いずれの季節にも共通する特徴は雨の多いことである。雨季の大部分を通じて、午前中は太陽が射し、しだいに雲が出て、降雨の開始は午後になるという日内変化がふつうであるにもかかわらず、この pabaru の時期だけは、これとは異なり、雨はしばしば早朝から降り始め、深夜に及ぶか、あるいは、たとえ降雨がなくても朝から厚い雲が低くたれ

21) 冒頭に掲げた俗言 (その2) の Surup kidang, turun kungkang (“オリオン [夜明け前に] 沈むころカメムシが発生する”) というのは、このころを意味すると思われる。Kools [1935: 19] はグレゴリー暦12月15日ごろと推定している。なお、kungkang (ヘリカメムシ) が発生するのは稲の生育段階が rampak (“一斉に出穂する”) になるころといわれる。

22) Pabaru という言葉はマレー語の tahun baru (新年、正月) の baru に由来するので [PKLBSS 1976: 43], pabaru Walanda は“オランダ正月”, pabaru Cina は“シナ正月”とでも訳することができるかも知れないが、いうまでもなく村人には新年を祝う習慣は全くなく、これらの言葉は単に“雨季の小休止期”に続く雨の多い季節を示す名称として用いられる。

こめ，山々には麓まで霧がかかっている，というような毎日が続く。太陽の照りつけることが少なく，ずぶ濡れになった身体をたき火で暖めながら農作業を続けることが多いこの時期は，村人にとって耐えがたいほど“寒い”季節である。ヒトには kaligata と呼ばれる皮膚病が，ニワトリには tétélo という病気がはやるのもこのころである。

Pabaru Walanda と pabaru Cina に共通するのは，“降ったり止んだり”(pupuruhpuyan) の“霧雨”(miribis または ngěprul)，あるいは“長時間続くシトシト雨”(ngaririncik) がほとんど連日続くこと (ngěcrěk) であるが，風の強さが異なることで区別される。Pabaru Walanda の季節を特徴づけるのは hujan angin，すなわち強い風を伴う雨である。もし，播種が平常通りの時期に行われ，pabaru Walanda の季節もまた平常通りの時期に訪れたとすれば，この時期の陸稲の生育段階は gědé paré，すなわち分蘖期となるはずである。村人にとって心配なことは，強風による作物の倒伏だけではなく，“播種雨”が早くきすぎたり，あるいは pabaru Walanda 期の到来が遅すぎたために，陸稲の出穂期 (rampak) が強風の多いこの時期と重なってしまうことである。出穂期の陸稲が雨風に吹かれると，結実せず，秕 (hapa) になってしまうからである。風による陸稲の被害を少しでも減じるために，水稻の在来種について見られるのと同様に，陸稲についても，二つないしそれ以上の品種の種糶を予め意図的に混ぜ合わせてから播種して，出穂時期をわずかずつづらせることにより，風に吹かれて秕となる危険を分散させる手段が取られる。<sup>23)</sup>

インゲンマメ (kacang beureum) の収穫の盛りは，ちょうどこの pabaru Walanda 期に当たる。同時に，野菜類が食べられるようになり，usum lalab (“野菜の季節”) が始まるのもこのころである。インゲンマメの収穫をしながら，同時に陸稲の第2回目の除草 (ngoyos mindo) と施肥も行われる。

Pabaru Walanda に続いて pabaru Cina がやってくる。Pabaru Cina 期の特徴は，pabaru Walanda とは対比的に，風の弱いことである。この時期に行う最も重要な農作業はタバコの苗床作り (ngipuk bako) である。この時期の雨は雨足が弱いため，細かなタバコの種子が，苗床にまかれたあと，雨水によって流される危険性が最も少ないからである。タバコの苗床 (ipukan bako) は竹林 (talunan awi) を切り払って造成したばかりの新畑 (kěbon bukaan) にしか作ることができない。すでに“雨季の小休止期”に，伐採 (nuar)，火入れ (ngaduruk)，荒起こし (měncug)，日干し (ngéré tanah) を済ませ，この時期まで放置されてきた新畑のあちこちにある竹叢 (dapur awi) の切り跡が，陽の射すわずかな時間に改めて焼かれ，切り株の一本一本に細かな刻みを無数に切りつけた後，タバコの種子が散播される。次いで，竹籤で苗床を覆う籠状の枠を組み，さらにこれをサトウヤシ (kawung) の葉で覆う (nurub)。種子，あるいは発芽後の幼体が野鳥につばまれないように，あるいは，雨水に流されないように，あるいはまた，わずかの時間でも直射日光にさらされると枯死してしまう幼体を保護するため，などなどの理由が聞かれる。発芽後1～2週間たつと，サトウヤシの葉は除かれる。

すでに述べたように，タバコの苗床は竹叢

23) 別稿参照 [五十嵐 1984 a : 56-59]。Natawidjaja [1914] が農業の啓蒙誌『農民の友』(Mitra Noe Tani) でこの問題に触れ，稲の品種を混ぜるようなことはしてはならないと訴えているように，この慣行は広く行われて来たらしい。今日

においても，新品種の卓越するブリアガン高地の平坦部 (バンドン，チアンジュール，スカブミなどの各平地部) を除く在来種地帯では，ごくふつうに見られる慣行である。

の切り跡にしか作ることができない。このため、竹林の所有面積がかなり広い者でも、タバコの苗床作りは数年に1度しか巡ってこないで、苗床作りをする者の数は多くなく、一つの集落に数人から、大きな集落でもせいぜい十数人いるに過ぎない。これら各集落に点在する“苗床持ち”から、タバコ栽培をしようとする者は、移植に適した苗（播種後40～50日の苗）を購入しなければならない。タバコ栽培をする者は、畑地の耕起・整地など植付けの準備を終えてから、“タバコの苗探し”（nyiar binih bako）を始めるので、移植に最適な苗は必ずしも近隣にあるとは限らず、しばしばかなり遠くの集落まで丸1日かけて探し求めることも珍しいことではない。タバコの苗床作りをする者は、できるだけ長期にわたって移植に最適な苗が常時供給できるように、細かなタバコの種子が雨水によって流される危険性の少ないこの pabaru Cina 期を通じて、時期を少しずつずらせながら、一つ一つの竹叢跡に次々と播種を行なってゆく。タバコの苗の販売は、竹林を切り払って新畑を開いた者だけがすることのできる特典なので、この機会をめいっぱい利用して、現金収入を稼ぐためである。

トウモロコシの収穫は、この pabaru Cina 期に始まるのがふつうである。陸稲は、分蘗期（gēde paré）を終わり、主稈と分蘗枝の高さが揃う段階（mapak daun）を迎える。この段階から“一つ二つの穂が出始める”（culcēl）段階の間に第3回目の除草を行う。とくに、雑草の繁茂が旺盛な“離れ畑”（kēbon misah）では、もしこの時に除草をしておかないと、刈取りのときに陸稲畑に入れなくなるほど、とげのある alimusa などの雑草が繁茂してしまう。このときの除草は、第1回目および第2回目の除草（ngoyos）が koréd（鎌の1種）で行われるのに対し、根を傷つけないように素手で行われる（ngarambas）。

同時に、肥料を散布（diawurkeun）する者もいる。

霧雨の多い pabaru Cina 期が終わると、再び強い雨の降る時期がやってくる。雨季の末期であるこの時期に狂ったように激しく降る強雨は hujan Sunda（“スンダ雨”）の名で知られる。“スンダ雨”は、強雨であるが、短時間で雨足の弱まる雨（ngagēbrét）で、しばしば雷を伴うが、風が吹くことはない。また、この時期は、pabaru のころのように、早朝から雨が降り続いたり、太陽の射さない曇り空が続くことは少なく、午前中は陽が射し、次第に雨雲が出てきて、降雨の開始は午後になるという雨季の典型的パターンに戻る。陸稲は、この時期に、穂孕期（reuneuh）から出穂期（culcēl, paparakoan, rampak の各段階）を迎える。トウモロコシの収穫のピークはこのころまで続く。もし太陽が射せば、wanci bēdug（正午）に人や日時計の影が無い日があるのはこのころである。<sup>24)</sup> 次いで、日ごとに太陽の昇る位置が真東より“北へずれて行く”（ngagilir ka kalér）ので、洗濯物の干し場を家の南側から北側へ移さなければならない。日没直後の空にはオリオン・ベルトが天頂付近（manceuran）に、すばるは西に傾いて（ngagilir ka kulon）見える。これらはいずれも乾季が近づいているしるしである。<sup>25)</sup> タバコを植え付けるための荒起こし（mēncug）を済ませていない者は、遅くともこの時期までに終えておかななければならない。また、タバコ栽培に大量に必要な、羊の糞便を主材料とする堆肥作りもしておかななければならない。

24) この日は、南緯約7度のジャワ島では、2月末日ないし3月1日に相当する [Ammarell 1983 : 17, 22]。

25) Ammarell [1983 : 17] は、日没直後の天頂にオリオン・ベルトが正中する日を2月26日と推定している。なお、すばるが日没直後に正中するのは、これより1カ月早い1月26日としている [ibid. : 16]。

## IV-3 雨季から乾季への移行期

激しい“スندا雨”の季節が終わるころ、久しく見ることのなかった澄んだ青い空が広がり、暑い陽射しの照りつける日がやってくる。しかしこの晴天は、せいぜい2～3日で終わり、再び激しい雨に戻る。何回目かの晴れ間に、木々の梢から多数の turaés (クマゼミの一種 *Crypto tympana acuta* Signoret) が“騒々しく鳴く”(ēngéng-ēngéngan) のが聞こえるようになる。Sada turaés maéhkeun iwung awi (“クマゼミの鳴き声がタケノコを殺す”)といい慣らわされているように、turaés が鳴くころには枯死するタケノコがみられる。<sup>26)</sup> 渡りをするツバメ walét が北へ飛び去るのもこの季節である。陸稲は beuneur héjo (“籾に中身が入る”)の段階からやがて“曙光色”(rayrayan)になり、まもなく収穫を始めることが可能である。

クマゼミの出現がタバコの植付け開始のタイミングを知らせるしるしである。クマゼミは約1カ月後に“一斉に死ぬ”(tumpur)が、そのころまでにはタバコの植付けを終えていなければならないという。クマゼミが現われてから“一斉に死ぬ”までの時期はグレゴリー暦のほぼ3月始めから4月始めまでに相当する。村人の分類に従えば、タバコの植付けシーズンはまだ usum ngijih (雨季)であって、降る雨はまだまだかなり激しいが、降り方はしだいに乾季型のそれに変わってゆく。“クマゼミが出たら、あと2カ月で乾季になる”といわれるように、雨は、まだしばらくの間、降り続く。雨季から乾季への移行期 (musim dangdangrat) に降る雨は hujan dangdangrat, あるいは buntut hujan (“雨のしっぽ”)

と呼ばれる。タバコの作柄を決めるのはこの“雨のしっぽ”である。タバコの植付けは、この“雨のしっぽ”がまだ十分に降るころ、すなわち、クマゼミが鳴き始めてから“一斉に死ぬ”までの約1カ月の間に、終えておかないと、良い作柄は望めないという。日雨量データを用いて、ウェット・スペルの生じる確率を試算してみると、ウェット・スペルは5月中旬ごろまで高い確率で生ずる(図3)。しかし、積算雨量が畑作物の再度の植付けに必要とされる300mm(ただし、乾季のピーク時から遡って積算した値)となる確率は、3月にはまだ十分に大きい、4月の第2三半期(4月11～20日)ころに75%を切り、以降急速に減じる(同図)。<sup>27)</sup> 雨量データは、ここでも、村人の説を支持する。

クマゼミの激しく鳴く、暑い陽射しの照りつける晴れ間をみて、すでに荒起こしのされている畑地の砕土 (ngēprék), 畝立て (ngalaci) を行い、ここにまずインゲンマメを穴播する。インゲンマメがわずかに芽を吹くと、これに平行にタバコの苗を移植する。まず男が表土を柔らかく砕き (nyěkcruk), 続いて女が素手で穴を開け、苗の主根に一握りの堆肥を添えて、穴に入れ、土を被せる。同時に一本一本の苗の脇に surian (*Toona cinnensis* M. Roem) の小枝を差し、日蔭を作る。この小枝は、苗が根を張ると、抜いて捨てる。雨季入りするときと同様、このときも、畑地の一区画あるいは周囲に種々の野菜が植えられる。

陸稲の登熟 (asak) は、タバコの植付け時期とは、ほとんど同時か、ほんのわずか遅れてやってくる。<sup>28)</sup> 混植されているアワ、ジュ

27) 注14)参照。

28) サラムンカルで作付けされている陸稲(すべて在来種)の生育期間は約150日弱、水稻(ただし在来種)のそれは180日余である。サラムンカルと付近一帯における陸稲の刈取り慣行は、播種作業に協力した者だけの参加を許す方式

26) 枯死するタケノコは、その形が julang (サイチョウ亜目に属する鳥で、*Buceros rhinoceros* または *Anthracoseros convexus*) の尾に似ているところから buntut julang (“犀鳥の尾”)と呼ばれる。

ズダマもほぼ同時期に刈り取られる。陸稲の刈取りが鎌で行われることはなく、すべて étém (穂摘みナイフ) を用いて一本一本の穂が切り取られる。陸稲畑にはとげのある alimusa などの雑草が生い茂って、鎌刈りすることはほとんど不可能であるうえ、混栽されているアワ、ジュズダマの穂を別途刈り取るためにも、陸稲は étém で穂摘みされなければならない。陸稲の収穫の際、未熟のため刈り残された稲穂は、やがて登熟すると適宜 ngagěmpélan (“遅れ穂刈り”) される。

陸稲の収穫がピークをすぎるところ、降雨と降雨の間隔が開き、降雨の激しさにも衰えが感じられるようになる。休閑中の畑地 (jami あるいは reuma) や刈取りの終わったばかりの陸稲畑では、kaso (*Saccharum spontaneum* L.), jukut bau (*Ageratum conyzoides* L.), alimusa (*Mimosa invisa* Mart.), eurih (*Imperata cylindrica* L.) などの雑草が花を咲かせている。雨季入りの時期と同様、このころも“風邪”(sakit panas) がはやる。

陸稲の収穫が終わってまもなく、日没直後の西の空に低く見えていたすばるがづいに見えなくなる。ちょうどこのころ、南の空に昇ってくる南十字星 (béntang langlayangan) が低く見え始める。すばるに続いてオリオン・ベルトもまもなく見えなくなる。すばるやオリオン・ベルトが1年のうちのある期間見えないことは、村人なら誰でも知っていることであるが、その期間は40日とも3カ月ともいわれる。すばるが、続いてオリオン・ベルトが、西の空へ沈んで、夜明け前の東の空に再び戻ってくるまでの間<sup>29)</sup>は、プラナタ・

(cěblokan) ではなく、播種作業をした・しないを問わず、また村落の内外を問わず、誰でも(ただし、ふつうは女だけ)が自由に参加し、各自の刈り取った10分の1が報酬として与えられる方式 (gacong) である(なお、水稻の刈取り慣行も同様である [五十嵐 1984 a : 39-40])。

マンサでは水稻収穫後の“農閑期”(apit lěmah) とされる時期である [van den Bosch 1980 : 255]。しかし、サラムンカルの村人にとって、この期間は暑く照りつける陽射しの中で、激しい労働の続く苦しい季節である。

この季節に行われる重要な農作業は、まずタバコの施肥 (ngagěmuk bako) である。これは、移植のときよりもはるかに大量の堆肥を担ぎ上げなければならない大変な重労働である。遠隔の“契約畑”(kěbon kontrak) を賃借している者は、何人かで共同して小型トラックを借り上げ、堆肥をいったんガルト県側へ運搬したのち、それぞれの賃借畑へ担ぎ上げるという手段がとられることもある。タバコの施肥が終わるところ、インゲンマメの収穫が始まる。同じころには野菜の収穫も始まり、再び usum lalab (“野菜の季節”) となる。インゲンマメの収穫が終わるとただちに、畝の補強作業 (nyacur bako) を始めなければならない。というのは、このころまでにタバコ畑の畝は雨水に流されており、40~50 cm に成長したタバコが倒伏するのを防ぐためである。このころまで続いている buntut hujan (“雨のしっぽ”) は、ますます雨と雨の間隔が開き、暑く照りつける陽射しの中で畝の補強作業を行わなければならない。タバコは、下位の葉 (kěpél) がまもなく収穫できるほどに大きくなっているが、上位の葉の収穫までには、なお除草、施肥、芽摘みなどが何回か繰り返される。

このころ、カポック randu (*Ceiba pentandra* Gartn.), surian (*Toona cinensis* M. Roem) などが落葉・結実を始める。Cang-

29) プラネタリウムを用いた Ammarell [1983 : 18] の実験によれば、すばるの伴日没 (heliacal setting—日没直後の水平線下に没する) は4月30日に、伴日出 (helical rising—夜明け直前の水平線上に昇ってくる) は6月4日に生じる。オリオン・ベルトは、すばるの伴日出と同日(すなわち6月4日)に伴日没が、6月25日に伴日出が見られる。

kurileung (*Pycnonotus cafer aurigaster* Vieill.), jogjog (*Pycnonotus goiavier analis* Horsf.) (以上いずれもヒヨドリの類), tikukur (*Streptopelia chinensis tigrina* Temm.), dĕdĕruk (*Streptopelia b. bitorquata* Temm.) (以上いずれもキジバトの類), モズ toéd (*Lanius schach bentet* Horsch.) などの野鳥が求愛行動 (barĕgĕr) と巣作り (nyarayang) をするのが見られる。これらは、いずれも本格的な乾季 (katiga) の到来を告げる。Surian が結実すると、タバコの芽摘み作業 (nyirung) の合間などに、種子を小枝ごと切り取って、タバコ畑、キャッサバ畑のあちこちに寝かせておく。畑地を休閑させたあと、surian 林となるような配慮である。目前に迫ったタバコの収穫に備えて、竹を切りだしてきては、干し台 (paratag) を組み、天日乾燥用の野冊 (sasag) を何十枚と編み上げておかなければならない。

#### IV-4 乾季の盛り

早朝、東の山稜から、まずすばるが、しばらくしてオリオン・ベルトが昇ってくるようになる。タバコの葉の収穫とそれを刻みタバコにする作業が始まる。村人が usum ngibun bako (“タバコの夜露当ての季節”) と呼ぶこの季節の始まりは、オリオン・ベルトの伴日出 (heliacal rising) をもって始まる kāsā 月 (プラナタ・マンサにおける第1月) のところに相当する。この kāsā 月の特徴は、“草木の葉から夜露が滴る”<sup>30)</sup> といわれているように [Daldjoeni 1979:72; 1983:10], 夜間の温度が下がるため、夜露が発生し易くなる時期で、タバコの葉を半製品化するプロセスの一環として、刻みタバコを夜露に当てる恰好の季節となる。このころ、“就寝前の祈り” (isa) を

する時刻 (午後7~8時) には南の空に南十字星が“南中” (lĕmpĕng di kidul) している。太陽が昇る位置は最も北にずれ、wanci bĕdug (正午) における人や日時計の影が最も南へ伸びるところである (グレゴリー暦の6月21ないし22日)<sup>31)</sup> Buntut hujan (“雨のしっぽ”) は、平年ならもうほとんど降らない。この時期は、ドライ・スペルの生じる確率が急速に上昇するところに相当する (図3)。タバコの収穫期には、雨が降ってはならないのであるが、もしこの時期まで“雨のしっぽ”がまだ続いていれば、刻みタバコの品質は著しく低下し、町の商人に安値で買い叩かれて、村人は大損をすることになる。

タバコの収穫は、最も品質の劣る下位の葉 (kĕpĕl) から摘み始め、ついで中位の葉 (panĕngah), 最後に最も品質の良い上位の葉 (rampas) へと移って行く。上位の葉が収穫となるのは7月から8月にかけてである。タバコ栽培は、町への出稼ぎを別にすると、村人に最大の現金収入をもたらすものであるから、その栽培過程と収穫後のプロセスには大変な手間と細心の注意が払われる。十分生育したとみなされる葉を一枚一枚、その分泌液で手をベトベトにしながらかみ取り、ひと担ぎ分 (60~70 kg) の葉がたまると、集落まで担ぎおろして、庭先で、刻みタバコにするための一連の処理を行う。庭先に持ち込まれたひ

31) 冒頭に掲げた俗言 (その1) の Lamun panonpoé ngamimitian ngésér-ngidul, sarta béntang langlayan ayana lĕmpĕng di kidul... (“太陽が南に動き始め、そして南十字星が [日没後] 真南に見えたら……”) というのは、このころを意味する。また、俗言 (その2) の Tanggal kidang, turun kujang (“オリオン [夜明け前に] 昇るころ木を切り倒し”) の tanggal が伴日出の意味であるとすれば、やはり同じころをさす。Kools [1935:19] の推定では6月15日、Ammarell [1983:18] の推定では6月25日である。なお、村人の日常会話で tanggal という言葉は、「(イスラム暦の) 暦日」という意味のほか、「(イスラム暦の) 暦月が改まる」という意味で使われることがふつうである。

30) ジャワ語の原文は “Sotyå murcå ing ĕmbanan”, 直訳すれば、“化粧張りから宝石が落ちる” となるが、これは、もちろん、“草木の葉から夜露が滴る” ことの譬えである。

と担ぎ分の葉は、まず、一枚一枚その品質を確かめ、黄色く変色した部分があれば、そこをちぎって除き (diciwit), そのあと風通しのよい所へ重ねて1~3晩寝かせる (dipeuyeum)。ついで葉芯を取り除き (disēbit), 数枚の葉を重ねて丸め (digéléng), それをナイフで細かく刻み込み (dikeureut), 竹で編んだ専用の野冊 (sasag) の上に丁寧に延べ (diicis), 庭先や道脇に竹を組んでしつらえた干し台 (paratag) の上へ順序良く並べて陽に当てる (dipoé)。この間、野冊に敷き詰めた刻みタバコが均等に乾燥するように、約2時間おきに裏返し作業 (bulak-balik) を繰り返す必要がある。雨の降る気配がまったくなければ、そのまま一晩放置し、あるいは、午後になって陽射しが雲に遮られれば、いったん軒先か屋内にしまい込み、翌早朝 (午前2~3時) 再び干し台の上に並べ直して、時々裏返ししながら、夜露に当てる (diibun)。このような作業を3日間ほど繰り返して半製品としての刻みタバコとなるまでの間、昼夜にわたって、ふいの雨に警戒し続けなければならない。刻みタバコは、ほんのわずか雨水に当たっても、その品質を著しく落とすからである。

タバコの収穫が盛りとなるころ、昨年雨季入り (あるいは“雨季の小休止期”) に植え付けられたキャッサバの掘り起こし作業が始まる。なおしばらく放置しておけば、塊根はさらに大きくなるというが、村人はそれを待たない。放っておけばイノシシによる被害がますますひどくなるからであるという。もっとも、この時期に1枚の畑地に植わっているすべてのキャッサバを掘り起こすのは、町の商人にすべてを買い取ってもらう場合で、掘り起こし作業は買い取った商人が作業人を雇って行う。村人が自家消費する場合には、小量ずつ必要に応じて掘り出すのがふつうで、その作業は塊根がまだ小さいころから始

まり、再び雨季がやってくるころまでには掘り尽くしてしまう。キャッサバを雨季到来以前に掘り尽くしてしまうのは、腐り易い生塊根を *gaplék*, *oyék*, *kiripik*, *kurupuk* など貯蔵可能なキャッサバ製品とする過程で、直射日光による天日乾燥を必要とすることによる。<sup>32)</sup> キャッサバの収穫が終わると、賃借畑なら、契約切れとなり、個人所有畑なら、そのまま放置して、休閑させる。

タバコの収穫期が終わりに近づくころ、夜明け前に見えるすばるの位置は、ほとんど真上近くにきている。村人は再びきたるべき雨季作の心配を始める。Agustusan (8月17日の独立記念日) が巡ってくるころまでには、刻みタバコの一部を販売して、新たな畑地を賃借するための現金を、用意しておかなければならない。

## V 農作業のタイミングをめぐる ——まとめに代えて

前章までの季節の推移と農作業暦の素描で、私は、降雨の開始、ゆるみ、といった降雨条件や、特定の時期に生じ易いとされる強風などの自然条件と、農作業のタイミングとの関係をやや強調しすぎたかも知れない。村に住み着いた当初、何よりも印象深く感じたのは、各村人が同一の農作業をほとんど同一の時期に開始することであった。が、このような「一斉作業」の理由を、降雨の季節的な多寡などの自然条件のみに帰すことができな

32) キャッサバの生塊根を縦長に4分して天日乾燥したものは *gaplék*, 養魚池等で2~3晩浸漬したのち粉砕し天日乾燥したものは *oyék*, 蒸かしたのち小片に刻み天日乾燥したものは *kiripik*, すりおろしたのち小麦粉と種々の調味料を加えてねまわし、型取りをして蒸かしてから天日乾燥したものは *kurupuk* とそれぞれ呼ばれる。これらはいずれも数カ月の貯蔵に耐えるというが、食べるためには揚げる、蒸かす、焼くなどの加熱処理が必要である。

いのは、降雨の季節的多寡の規制を受けない  
 水稻耕作においても、やはり、同一の時期に  
 同一の農作業が一斉に行われることを考えれ  
 ば、あきらかである。他所でも述べたように  
 [五十嵐 1984 a : 41-44]、水稻耕作の場合、  
 年間にわたっていつでも作付けすることが可  
 能であるにもかかわらず、各世帯が思い思い  
 に勝手な時期に作付けをすることは、病虫鳥  
 獣害が発生し易くなるとの危惧を理由に、好  
 ましくないことと考えられている。畑地耕作  
 における農作業についてもまったく同じ理由  
 で、各村人は同一時期に同一の農作業を行  
 うことが強く期待されている。にもかかわらず、  
 多くの村人がこれこれの農作業はこれこれ  
 の時期に行うのが“最も望ましい”と述べる  
 その一方で、個々の農作業はその“最も望ま  
 しい”とされる時期に必ずしも行われるわけ  
 ではなく、知識と実際の活動との間にかなり時  
 間的ずれを認めることができる。ここでは、  
 本稿のしめくりとして、個々の村人が実際  
 に農作業を開始するタイミングに影響を及ぼ  
 すと想定される自然条件以外の要因につい  
 て、簡単に触れておきたい。

筆者は、村における日々の活動を知る目的  
 で、幾人かの村人にかなりの長期にわたって  
 ごく簡単な日記をつけてもらった。この日記  
 に基づくと、“最も望ましい”とされる時期  
 ——自然条件の季節的变化から判断されるも  
 のにせよ、作物の生育段階から判断されるも  
 のにせよ——に当該の農作業がサラムンカル  
 全体としては“一斉”に始まることが確認で  
 きる一方で、かなりのバラツキ——その多く  
 はさまざまな程度の遅れであるが——もあ  
 り、それには、その世帯の“都合”もあれば、  
 村全体に共通する“都合”が関係しているこ  
 とがわかる。

まず第1に認められるのは、村落内におけ  
 るステータスの違いに基づくものである。村  
 人の多くを占める *jalma sangsara* (“困窮する

人”)<sup>33)</sup> と呼ばれる人々——その多くは、家  
 族労働のみで耕作可能なほどの広さの“賃借  
 畑”を耕作する——の耕地における農作業の  
 開始は、しばしば、“最も望ましい”とされ  
 る時期より遅れる。というのは、彼らは、他  
 人の経営する耕地での農作業を優先させなけ  
 ればならないからである。農作業のシーズ  
 ンは、彼らにとって、近隣の村落、あるいは  
 ガルト県にまで出かけ、*jalma beunghar*  
 (“富める人”) と呼ばれる上層の人々にクー  
 リーとして雇われ、日当の支払いを受けるこ  
 とで生計をなりたせる重要な機会となる。  
 それだけではなく、農作業のシーズンには、  
 サラムンカルまたは近隣の村落に住む親、あ  
 るいは近い親戚などが経営する耕地での農作  
 業に参加することが——奉仕という形であ  
 れ、日当の支払いを受ける農業労働という形  
 であれ——強く期待されている。したがって  
 彼らが、他人の耕地での農作業を終えて、よ  
 やく自らの耕地で農作業にとりかかることが  
 できるのは、“最も望ましい”時期が過ぎ去ろ  
 うとしているところからとなる。*Jalma přěcit*  
 (“質素に暮らす人”) と呼ばれる中間層に属  
 する人々は、日当の支払いを受ける農業労働  
 に生計を依存しているわけではないが、やは  
 り親、親戚などの経営する耕地での農作業に  
 参加することが強く期待されており、また実  
 際にそれを優先させるため、自らの耕地にお  
 ける農作業はしばしば遅れ気味になる。

第2は、村外における現金収入活動の機会  
 との関係である。耕地の経営規模が大きく、  
 十分な数のクーリーを雇うことなしには耕地  
 経営が不可能な者にとって、出稼ぎのシーズ  
 ン——サラムンカルの場合は都市部で果実が  
 出回るシーズンに一致する——は、思うよう

33) *Jalma sangsara* (“困窮する人”), あるいは  
*jalma beunghar* (“富める人”), *jalma přěcit*  
 (“質素に暮らす人”) などの用語がどのような  
 意味あい使われているかは、他稿 [五十嵐  
 1984 b : 194-195] で触れたことがある。

に必要なだけの労働力を揃えることが難しくなる。というのは、農作業のシーズンごとに農業労働者となるはずの, *jalma sangsara* (“困窮する人”) に属する人々のなかには, 自らの小規模な耕地における農作業を家族労働で行う以外は, もっぱら, 村で農業労働をするより, 遥かにより収入が期待できる出稼ぎに, 従事する者が少なくないからである。とはいえ, 彼らにしても, 村人との人間関係を無視してまで出稼ぎに従事することは不可能らしく, 親, あるいは親戚からの要請があれば, 即刻, 村へ戻って農作業に参加しなければならない。したがって, 同一, あるいは近隣の村落にすでに独立した息子・娘を多数持つ者は, 望む時期に必要なだけの労働力を, 比較的容易に確保できるはずである。もちろん, そのような手段で労働力を確保することが不可能な者も少なくなく, 彼らは, 農業労働をやってくれそうな人物に, まとまった日数のあいだ連続して雇い上げのことを約束し, 場合によっては約束した期間の日当を前払いまでして, 人集めに精を出さなければならない。連続して雇われることが保証されれば, 収入の不安定な出稼ぎより, 村でのクーリー仕事を選ぶ者もいるからである。雇う側には, もちろん, まとまった現金が必要となるが, その現金が必要な時期までに用意できないことも, また農作業を望む時期に始めることのできない理由として挙げられる。

第3に指摘できるのは, 本報告でしばしば触れてきた水稻耕作周期との関係である。村人の生計維持活動のなかで最も重要な水稻耕作は, 雨量の季節的多寡と関係なく, 収穫期が7カ月ごとに到来する, という独自のサイクルを有する。このため, 水田における農作業と畑地における農作業が同一時期にかち合うようなこともあり, そのような場合にいずれの農作業を優先するかの微妙な選択が行われ, ある場合は水田耕作の, またある場合は

畑地耕作の農作業が優先されるため, いずれか一方の農作業が遅れぎみに行われることとなる。水田と畑地における農作業のはちあわせに, 出稼ぎのシーズンが重なることにより, サラムンカルにおける“労働不足”はときとしてかなり深刻な状態になる。

降雨の季節的多寡に規制される畑地耕作周期と, その規制をうけない水田耕作の周期とともに, 村人が日常生活において用いるイスラム暦による周期についても触れておかなければなるまい。スマトラでは稲の収穫時期を断食月明けの大祭(ルバラン *Lĕbaran*)に合わせて耕作が行われていた地方もあったというが[大木 1984: 314], サラムンカルにおいてイスラム暦は, もっぱら宗教的行事に係わっているのみで, 農耕活動のタイミングを直接に規制することはなく, ルバランにタイミングを合わせた活動としては, せいぜい, ルバランを数カ月後にひかえたころ, 御馳走となる淡水魚の稚魚を養魚地に放っておくことぐらいである。また, 断食月の間, 村人の生業活動のパターンが変わることはなく, 労働時間が減少するようすも見られないので[Igarashi 1981], よくいわれる“断食月中の活動の低下”が農作業の進行に, なんらかの影響を与えるとは考えにくい。ただし, ルバランを間近にひかえたときには, まとまった現金が必要となるので, 多くの村人は, やむなく農作業を遅らせても, にわか商人となって現金稼ぎに時間を費やさなければならない。

以上に述べてきたように, 個々の世帯の“都合”, あるいは村全体に共通する“都合”によって, 農作業はいくらでも遅れうるが, 一方, *kabolér* (農作業をしかるべき時期にし損なうこと) となることへの強い不安が制限要因となり, なんらかの“都合”で農作業の遅れた者は, 耕起の手順をはしよる, 除草を省略する, など, 行うべきいくつかの手はずをやむなく省略するような無理をしてまで

も，なんとかきりきり間に合わせようとする。このような収量の減少に結びつきうる無理を最も犯し易いのは，いうまでもなく，jalma sangsara (“困窮する人”)に属する人々である。彼らは，その耕地が遠隔地にあり灌漑条件等が劣るなどの耕作条件において不利なだけでなく，村人のごく一部を占めるにすぎない jalma beunghar (“富める人”)の後追的に農作業のタイミングが決められてしまう，という点においても不利な立場にいる。これにたいして，jalma beunghar は，必ずしも必要な労働力を望む時期に確保することができるというわけではないが，やはり，この点でもずっと有利な立場におり，近隣を含む小地域における農作業の開始時期を実際上決めてしまうペース・メーカー的役割を果たしている。

## 謝 辞

本稿をまとめるに当たり，多くの方々にお世話になった。とりわけ，岩崎恭輔（京都大学花山天文台），大橋厚子（当時インドネシア大学），佐藤宏文（当時パジャジャラン大学），Supiandi Sabiham（京都大学熱帯農学），富永泰代（当時サトヤ・ワチャナ大学）の諸氏からは，プラナタ・マンサ関係の文献などに関し，多くのご教示をいただいた。ここに記して厚くお礼を申し上げる。

## 引用文献

- Ammarell, G. 1983. The Planetarium and the Plough: Interpreting Star Calendars of Rural Java. (to appear in the *Proceedings of the First International Conference on Ethnoastronomy*, held at the Smithsonian Institution, Washington, D. C., September 5-9, 1983.)
- Anonymous. 1970. Pranatamangsa. *Mangle* 13(235): 13.
- Bie, H.C.H. de. 1901. De Landbouw der Inlandsche Bevolking op Java. *Mededeelingen uit 'sLands Plantentuin* 65: 1-143.
- \_\_\_\_\_. 1911. *Rijstcultuur op Java: Korte Beschrijving der Rijstcultuur van de Inlandsche Bevolking op Java*. Mededeelingen Uitgaande van het Departement van Landbouw No. 16. Batavia: G. Kolff & Co.
- Bosch, F. van den. 1980. Der Javanische Mangsalkalender. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 136(2/3): 248-282.
- Burg, C.L. van der. 1904. *De Voeding in Nederlandsch-Indië*. Amsterdam: J.H. de Bussy.
- Daldjoeni, N. 1979. Menyelamatkan Penanggalan Pertanian Jawa. In *Pedesaan, Lingkungan dan Pembangunan*, edited by N. Daldjoeni et al., pp. 66-77. Bandung: Penerbit Alumni.
- \_\_\_\_\_. 1983. *Penanggalan Pertanian Jawa Pranatamangsa: Peranan Bioklimatologis dan Fungsi Sosiokulturalnya*. Seri Penerbitan Proyek Javanologi No. 12 Th. I. Yogyakarta: Badan Penelitian dan Pengembangan Pendidikan dan Kebudayaan.
- Falcon, W.P.; Jones, W.O.; Pearson, S.R.; Dixon, J.A.; Nelson, G.C.; Roche, F.C.; and Unnevehr, L.J. 1984. *The Cassava Economy of Java*. Stanford: Stanford University Press.
- 広瀬昌平. 1979. 『熱帯のキャッサバ——その栽培から利用まで——』東京：国際農林業協力協会.
- Hoogerwerf, A. 1949. *De Avifauna van Tjibodas en Omgeving (Java)*. Buitenzorg: Koninklijke Plantentuin van Indonesië.
- Horne, E.C. 1974. *Javanese-English Dictionary*. New Haven: Yale University Press.
- Hose, C. 1905. Various Methods of Computing the Time for Planting among the Races of Borneo. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 42: 1-5, 208-210.
- Idak, H. 1982. *Perkembangan dan Sejarah Persawahan di Kalimantan Selatan*. Banjarmasin. (mimeographed)
- Igarashi, T. 1981. Change in Daily Activity Patterns during the Ramadan in an Islamic Society. In *Proceedings of the Second International Symposium on Asian Studies 1980*, Vol. III, pp. 467-477. Hong Kong: Asian Research Service.
- 五十嵐忠孝. 1984a 「西ジャワ・プリアガン高地における水稲耕作——若干の人類生態学的観察——」『農耕の技術』7: 27-61.
- \_\_\_\_\_. 1984b 「西ジャワ・プリアガン高地の食糧資源と人口」『栄養生態学——世界の食と栄養——』小石秀夫；鈴木継美（編），189-217ページ所収。東京：恒和出版。
- Koens, A.J. 1926. *Boekoe Batjaan tina Bab Pare*. (Piwoelang Elmoe Tatanen X.) Departement van Landbouw, Nijverheid en Handel. Weltevreden: Landsdrukkerij.

- Kools, J.F. 1935. *Hoema's, Hoemablokken en Bosch-reserves in de Residentie Bantam*. Proefschrift. Wageningen: H. Veenman & Zonen.
- Lookeren Campagne, C.J. van. 1899-1905. Rijst. In *Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië*, 3e Deel, pp. 476-500. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Meijer, J.J. 1890. Bijdragen tot de Kennis van het Bantensch Dialect der Soendaneesch Taal. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië* 39: 222-261.
- Morris, R.A.; and Zandstra, H.G. 1979. Land and Climate in Relation to Cropping Patterns. In *Rainfed Lowland Rice: Selected Papers from the 1978 International Rice Research Conference*, pp. 255-274. Los Baños: International Rice Research Institute.
- Natawidjaja, Ranga. 1914. Panambah Piwoelang Bab Perkara Bibit Pare. *Mitra Noe Tani* 14: 123-128.
- Oldeman, L.R. 1975. *An Agro-Climatic Map of Java*. Contributions from the Central Research Institute for Agriculture Bogor No. 17.
- Oldeman, L.R.; and Frere, M. 1982. *Technical Report on a Study of the Agroclimatology of the Humid Tropics of Southeast Asia*. Rome: Food and Agricultural Organization of the United Nations.
- 大木 昌. 1984. 「インドネシア社会経済史研究——植民地期ミナンカバウの経済過程と社会変化——」東京: 勁草書房.
- Oudemans, J.A.C. 1881. Mededeeling Betreffende de Sterrebeelden, Wier Hoogte boven den Horizon, op een Bepaald Oogenblik van den Nacht, door de Javanen ten Behoeve van den Landbouw Geraadpleegt Wordt. In *Verslagen en Mededeelingen der Koninklijke Academie van Wetenschappen*, Afdeling Natuurkunde, 2de Reeks, Deel XVI, pp. 177-197. Amsterdam: Johannes Müller.
- PKLBSS (Panitia Kamus Lembaga Basa & Sastra Sunda) 1976. *Kamus Umum Basa Sunda*. Bandung: Penerbit Tarate.
- Republik Indonesia, Departemen Perhubungan, Pusat Meteorologi dan Geofisika. 1976. *Intensitas Hujan di Indonesia 1971*, Jilid IIIA (Jawa Barat). Jakarta.
- Republik Indonesia, Departemen Perhubungan, Badan Meteorologi dan Geofisika. 1980. *Intensitas Hujan di Indonesia 1957-1966*, Jilid IA (Jawa Barat). Jakarta.
- Schadee, M.C. 1914. De Tijdrekening bij de Landak-Dajaks in de Westerafdeeling van Borneo. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië* 69: 130-139.
- Schophuys, H.J. 1936. *Het Stroomgebied van de Barito: Landbouwkundige Kenschets en Landbouwvoorlichting*. Proefschrift. Wageningen: H. Veenman & Zonen.
- Snouck Hurgronje, C. 1906. *The Achehnese*. Leyden: E.J. Brill.
- Sollewijn Gelpke, J.H.F. 1874. De Rijstkultuur op Java. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië* 3e Volgreeks, 9e Deel: 109-196.
- Sutedjo, Ali. 1959. Hal Tatanen. *Pa Tani* 8(3): 8-13.
- 玉井虎雄. 1944. 「農村實態調査——ジヨクジャカルタ侯地バントール縣ゴデアン郡マユダン村ツームツト區——」總調資料第六三號. ジャワ軍政監部總務部調査室.
- Tjondro Negoro, Raden Adhipati Ario. 1880. Bijdrage tot de Kennis der Mangsa's, Vroeger Algemeen, Doch Tegenwoordig Slechts bij een Gedeelte der Javaansche Landbouwers Bekend. *Tijdschrift voor Nijverheid en Landbouw in Nederland-Indië* 25: 438-448.
- Tohir, Kaslan Abdullah. 1948. *Pedoman Bertjotjok Tanam, Bagian I: Pengetahuan Umum*. Djakarta: Balai Pustaka.
- Veth, P.J. 1907. *Java, Geographisch, Ethnologisch, Historisch*, 4e Deel. Haarlem: De Erven F. Bohn.
- Visser, S.W. n.d. *Draaibare Sterrenkaart voor de Tropen*. Groningen: J.B. Wolters.
- Winstedt, R. 1951. *The Malay Magician Being Shaman, Saiva and Sufi*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Wiryomijoyo, Rochim. 1982. Daerah Huma di Ujung Genteng. *Trubus* 13(149): 214-215.
- Woensdregt, J. 1928. De Landbouw bij de To Bada' in Midden Selebes. *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land-en Volkenkunde* 68: 125-255.
- 山下晋司. 1982. 「水田ミナンガ——サダン・トラジャの一枚の水田をめぐる社会人類学的覚書き——」『東南アジア研究』20(3): 373-392.
- Zoetmulder, R.J. 1974. *Kalangwan: A Survey of Old Javanese Literature*. The Hague: Martinus Nijhoff.